

編集後記

『戦史研究年報』第10号をお届けいたします。今号は10番目という節目を迎え、情報発信ならびに過去の成果の活用という方針から、創刊号から第9号までの総目次と論文要約の掲載という特集を企画しました。論文要約の作成に当たっては、すでに自衛隊を退職された方を含め多くの方々にご協力をいただきました。ここに厚く御礼を申し上げます。また今号の論文についても要約を掲載しております。

「論文」は、戦史部の平成17年の研究成果の中から3篇を、また投稿論文として1篇を掲載いたしました。芳賀論文は、従来評価の分かれるインドネシアにおける日本の軍政について、その功罪について再考するものであり、現在の紛争解決後の安定構築にインプリケーションを与えるものです。柴田論文は、日本海軍航空隊の救命装備品について検証を行い、その研究開発が軽視されていたわけではなく、捕虜となることを恥辱とすることからくる救命装備品の非装着に問題があったことを明らかにしました。装備品の運用について、その思想的背景から多いに考えさせられるものです。弓削論文は、旧陸軍内の犯罪・非行について、これまで日本陸軍の特殊性に原因を求める分析が多かったなか、公平な立場からその実態と陸軍のとした対策について明らかにしました。部下の服務指導に当たる自衛隊員にとって示唆の多いものです。塚本論文は、旧陸軍の戦史編さんについて広範な資料から各時代の戦史編さんの実態を解明し、その課題と限界について明らかにしたものです。現代に通ずることも多く、戦史編さんに当たる者だけでなく、公刊戦史をもとに歴史を研究する者にも必読の論文でしょう。

「研究会記録」は、米国陸軍大学歴史研究所長クレーン教授の“Killing Vultures, Containing Communism, and Venting Pressure : International Impacts of the Korean War”を紹介いたしました。朝鮮戦争の教訓を米国が学ぶことができず、ベトナム戦争で同じ間違いをくりかえした過程を明らかにしたもので、冷戦史を研究する者にはインプリケーションの多い論文でしょう。

「国際会議報告」はポツダムで開催された第32回国際軍事史学会大会概要及びソウルで開催された日韓軍事史研究会の概要をそれぞれ掲載いたしました。「史料紹介」は、南満州鉄道創設百周年を記念し「南満州鉄道株式会社総裁への命令の件」と、二・二六事件70周年を記念し二・二六事件「蹶起趣意書」を掲載いたしました。

「活動報告」には、今回戦史部の調査研究項目を加え、情報発信の一助としました。

最後に本号発行のために御協力いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます編集後記といたします。

(柳 澤 潤)

本年報に示された見解は執筆者個人のものであり、防衛研究所または防衛省の見解を代表するものではありません。論文の一部を引用する場合には、必ず出所を明示してください。また長文にわたる場合には、事前に当研究所へご連絡ください。

〔編集委員〕

加賀谷 貞司(委員長)

庄司 潤一郎

塚本 隆彦

山村 健

高橋 敏政

〔編集スタッフ〕

柳澤 潤 大場 一石 立川 京一 岡田 志津枝